

指定から10年

重要文化財 武雄鍋島家洋学関係資料

平成26(2014)年に武雄市が所蔵する武雄鍋島家洋学関係資料(2,224点)が国の重要文化財に指定されてから今年で10年になります。武雄鍋島家洋学関係資料は、武雄領主であった鍋島家に伝わった資料群で、西洋の本や絵図、植物の標本、大砲など、さまざまなものがあります。

今回は、指定された資料の中から「薩州鹿児島見取絵図」をご紹介します。

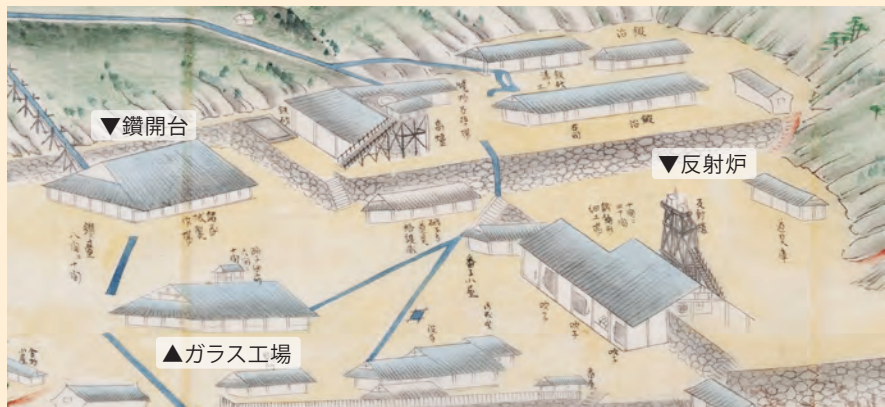
「薩州鹿児島見取絵図」安政5(1858)年

安政4年に佐賀藩士の千住大之助らが鹿児島へ行った時にさまざまな場所を見学し、その様子を描いたものです。薩摩藩主・島津斉彬がすすめた集成館事業に関わる工場や砲台などが描かれています。絵図は全部で12枚・18図あり、佐賀藩士が鹿児島で見聞きしたことをまとめた風説書2冊も一緒に残されています。

「薩州鹿児島見取絵図」より「〔磯別邸の図・華倉村銅吹試方図〕」【反射炉付近拡大】

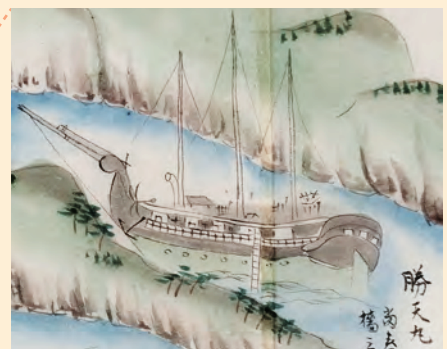
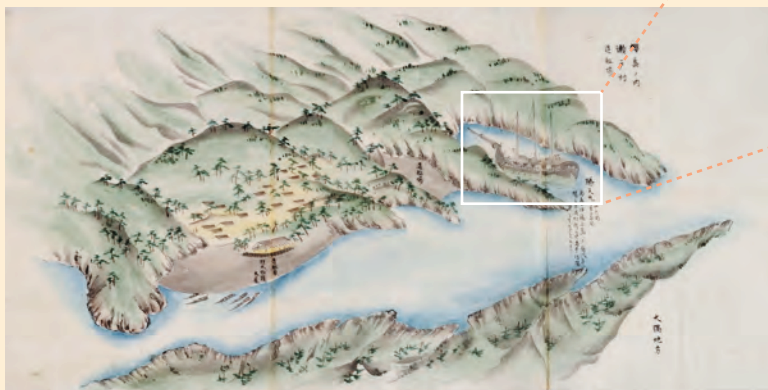
嘉永5(1852)年、薩摩藩主・島津斉彬は、鹿児島城下郊外の磯にあった藩主の別邸・仙巖園の横に、大砲をつくるために必要な鉄を溶かす反射炉をつくりはじめました。その後、反射炉の周りに次々と工場を建設し、安政4年、斉彬はこれらの工場群を「集成館」と名付けました。

この絵図には、反射炉や大砲の砲身に穴をあける鑽開台、薩摩切子をつくるガラス工場など、集成館のさまざまな工場が描かれています。



「薩州鹿児島見取絵図」より「桜島ノ内瀬戸村造船場」

桜島の瀬戸村(現在の鹿児島市黒神町)にあった造船所が描かれています。図中の船は、薩摩藩の「承天丸」(絵図では「勝天丸」)で、嵐で壊れた部分を修理しているところです。



今回紹介した資料は、武雄市図書館・歴史資料館内のこども歴史コーナーでもパネル展示中です。

